

アイ・ティー・イー 医療・生鮮食品向け物流

被災者の起業支援 海外も視野

飛躍カンパニー

温度管理が必要な医療分野や生鮮食品分野向け物流サービスを提供するアイ・ティー・イー(東京都千代田区)は「もうけは二の次、まずは日本を元気にしたい」と話すインド出身のパンカジ・クマール・ガルグ社長兼最高経営責任者(CEO)が切り盛りする異色の会社だ。東日本大震災の被災地向けに新サービスを展開し、アジア市場に

打って出る構想を描いている。ガルグ社長は四半世紀前にインドの大学を卒業して技術者として来日。神戸製鋼所を皮切りに安川電機、シーラス・ロジック、インテルなどで活躍した。中でもインテルでは中央演算処理装置(CPU)「セントリーノ」開発に携わったほか、国際的マーケティングを指揮し半導体業界での知名度は高い。

しかし、独立・起業で選んだのは畑違いの物流分野。かねて台湾で取得していた「アイスバッテリー」という電力を使わな

い保冷装置を軸にワクチンや血液、生鮮食品などを輸送する低コストサービスを包括的に提供している。医療分野向けが売り上げ全体の8割を占める。昨年5月には日本航空、富士電機と保冷輸送技術を活用した共同事業を行うことで合意。このほか、自動車、プラスチックメーカーなど関係業界で有力な協業パートナーの輪を広げている。

ガルグ社長の経営哲学には徹底した社会貢献の考えが息づいている。インドでは企業のチャリティー精神が旺盛であること

アイ・ティー・イーのガルグ社長兼最高経営責任者(CEO)。独自技術で社会貢献を実践している



に加え、同社長は、父親が35歳で学校を設立した活動などを目の当たりにしてきたからだ。企業は不幸な人を助けるために存在すると言ってはばからない。

同事業を選んだのも、ワクチン不足で困っている新興経済国

を支援したいとの動機が働いたためだ。現在は長年生活してきた日本に恩返ししたいとの思いを強めているという。「将来の日本のために何が残せるかと考え思いついたのが、一国の文化の基礎である農業。当社の保冷技術を使えば農産物を海外に持っていくこともでき、日本の農業を元気にできる」と話す。

東日本大震災の被災地向け新事業の構想も温めている。被災して職を失った人が生計を立てられるような低コストの設備を提供する計画だ。来年からは、同様のサービスをパートナーの企業と協力しながら台湾やシンガポール、タイ、中国などでも展開する方向で準備を進めており、実現すれば国内外の注目を集めそうだ。(佐藤健二)